

愉快なるは其地の自然であらうが、其土地を知らぬ人には少しく變に思はれる。水野以文君の、『九三』城邊川岸の一部』は、東京のローカルカラーがよく現はれてゐる、まづ缺點の少ない繪であらう。赤城泰舒君の、『九六』高原の朝』は、かゝる境地に往つた事のない人には、此繪の價値は分るまい。私の見る處では、其構圖に於て遺憾の點も多く、また描法に於て伸ひやかでないといふ批難もあらうが、高原といふ感じは充分に出てゐるたゞ、朝と斷はられて、そこに異議が生ずるかも知れない。

要するに、本年の水彩畫はあまり振はれない、そこで紹介の筆を執るのも張合がない譯であるが、こゝに一言したいのは、この二十點のうち七點、即ち三分一以上は、日本水彩畫會研究所の、學生の手になつたものであつて、吾々の經營にかゝる、微々たる研究所より、これ丈けの出品を見ることが出來たのは、本誌の讀者と共に大に祝したいと思ふ。

序に言ひたひのは、額縁の不調和によつて、其繪が大なる害を受けてゐるといふことで、現に相田君の『暮色』の如き、赤城君の『高原の朝』の如きは其一例である。額縁と繪との調和については、他日稿を改めて思ふ處を述ぶることにしやう。(完)

△ △ △

茶人は自然を愛し自然の風景を見破るの心掛けなかるべからず、これなければ風流雅致の道も不風流となるべければなり。

(岡田摘翠氏)

日本の隨處隨錄 [中]

鶴澤 四丁 譯

スワラから遠く無い處で、木曾川の畔に、大きな偏平たい巖があつて、『ネザメノトコ』といふて居る。これは日本の『リツプヴァンヴェインクル』ともいふべき、浦島といふ漁夫の子が、長い失神から生氣に反つた處としてあるのである。この話の筋をいふと、浦島は日本の海邊ユラといふ處に兩親と共に漁夫をして居つた。或日船で乗出したまゝ歸つて來ぬので、浦島は死んだものとしてしまつた。浦島は海神の娘に逢ふて、姫と共に互に愛し愛されて、常盤の國に往ふことになつた。幸福のうちに數週間を暮した積であつたが、遂に『わが父母がこれを心配するであらうから、歸つて慰めなければならぬ』ので、しばしの間忍んでくれないといふてこゝを出立した。その時姫が浦島に小匣をくれて、いふには、何時までもこの匣を開けなければ、儂は御身と共に離れない、もし開ければ儂も常磐の國も永遠に失せてしまふ。浦島は實際數百年を過ごして居つたので、自分の家はいふまでもなくなくなる、ユラの物は皆變つて居つた。浦島は失望落膽して、禁せられた箱を開くと、暮のような薄碧い煙が立上つて海に消ゑると、紅顔の美少年が忽ちに老年と化して、暫時にして海岸に倒れて死んでしまつた。箱の中には姫が二人が幸福な生涯の時を封じてあつたのであつた。

中山道では、ミドノ附近位美麗な處は他にあるまい。谷合が狹

くて、路傍には木曾の奔流が隠見し、樹木が豊富で、胡桃、榎、栗、楓等が路を覆ふて、また竹の大林が吹上くる谷間の風によいで居る。川畔にも立派な樹木があつて、既にお馴染のものあり、また目新しいものもある。鶴鴿が岩から岩へと飛廻はり、燕が電線へ線を爲して止つて居るので、秋の近きを知らせ顔であつた。

中山道からハシバへと轉じたり、こゝはマゴメ峠への上り口である。小さな田舎道を通り、再び西の方ヒロセガワの流域に轉じて、二日路で、飯田と天龍川の畔へと出た。この道はわれの『旅行案内』にも書いてなかつた。がカミノスワから伴ふて來たナカジマサンジューといふ車夫はこれが通れると主張して、われの荷物を傳て持つて來たのであつた。しかし折々二人位の人夫を雇ふて補助さしたり、或處では人夫や松葉やが俵を荷ふたり、荷物を運んだりした事もあつた。こゝにまた樹木の鬱葱とした、押付けられるやうな、上り坂があつた。われは先頭第一に登つて行くと、後から人夫やら車夫等



小笠原大村奥に到る途
松山忠三筆

は『ヨツヤ、く』と掛聲をして互に勵まして登つて來る。上方の木の葉の一團はやゝ下の方の灌木や齒朶やで、緑の迷路にある心地がした。折々嘖聲で鳴く鶯が飛廻はり、また時としては足元に七八寸もある墓が居つたのを見た。二三哩も後に人夫等が皮の剥いた墓を茶屋へ下げて來た。それは高價な西洋料理

のポーレットよりは大きかつたやうであつた。でこれは弱い小供の藥にするのだといふことであつた。

トキマタで東海道まで急行の約束で、舟と舟夫五人とを雇ふた。川が急流であるから、二十四圓より下ではやれないといふのであつた。十時間乃至二時間の旅行にして可なり好い價であるが、舟を曳き返すのに十日乃至

十二日間かゝるといふのを思ふと、法外に高いものでもない。日本の山は多くは廣い砂利床の中に細いちよろ／＼流があつて、大雨の際に氾濫するのであるが、天龍川はスワ湖といふ貯水があるので、平に舟運の便はるのである。こゝで使用する

舟は十三尺許の長さで、底と側とか偏平で、舳が方形で高く船首は尖つて居る。造りは弛くて、滑り易くしてある。底板は薄くて、淺瀬や荒波に逢ふと、敷物のやうに動揺する。

荷物ば船の中央へ積んで、われと松葉との坐を並べて取つた。一人は舳で長い棹を操る、四人は船首で働いて居る。船が出る之間もなく斷崖へと落ちた、もう一二寸で巖角へ突當る處を、運好くよけて、渦流を廻つてから、一小村ナカベに晝食のため止たので、息もつかずに操つて來た。こゝではスケツチをする隙も、考へる時もなく、たゞ烈しい競争に興じて居つた。河が高山の間を捻れて、急に落込む所がある。水の澎湃として居る處で舟が突入する、一人は船首で頻りに擡て水をかく、船尾の三人は狂氣の如くに漕ぐ、この時は舟がとても助かるまいと思ふた。その間に舟は忽焉として一轉して、平然として流れ行くのであつた。續いて舟は快走する。カジマに入つて山岳がなくなつて、平原となつて來た。こゝより下は流は急であるが滑かである。處々に水路がある、それに堤防があつて、柳や竹が生いて居る。そこには鳥鷺や鴨が喜んで飛んだりかけたりして居る。途中船に帆を上げて行くのに逢ふた、風は大概河上へ吹き上げるので、舊東海道の崩れかゝつた橋をくぐるころは日が暮れたが、ノアの箱舟のやうなものや水車等はよく見えた。トキマタから、ナカノマチへの九十哩間の行程を十時間で旅行したのは實に驚くべきものである。尤も下流の方は比較的流が緩慢であつた。

それから一ヶ月後に靜岡に滞在した。こゝは東海道の大きな町で、將軍の偉大な家康が晩年を送られた處、また最後の將軍の慶喜が一八六八年に退隱して、今猶隱君子として世を送られて居るのである。家康は最初久能山に埋られたのであつた。こゝは靜岡から人力車で一時間で達する處である。最初の道のほとりは稻田で、それから美しい色のした小山があつて、白い麥や暗緑の茶、蒼緑の大根等の筋がある。それからやゝ上つて、海の方へと狭くなつて居る。その邊は砂地で、斷崖と海岸の間には多くの甘蔗が植はつて居る。こゝにある小村には干魚の香がして居る、戸毎の擔に、松魚の片が下げてある。海岸には鹽煮る釜の蒸發管が處々に見える。斷崖の頂上には靈廟がある、これは日光靈廟の模範である。こゝに達する段は自然石を切つて段を造つてある。この靈廟は日光や芝のと比較しては巧妙ではないが、一種獨特の美があつて、自然の風景が、その美を補ふて居る。石や木の幹には銀色の苔蘚蒸して、朱塗の殿堂の後景に對していひしれぬ美しさをなして居る。廟は垣を廻らして、屋根は銅で、多くは黒と金色であつた。神官が祈禱をして、供物の甘い酒と菓子とをくれた。家康の死骸はこゝに埋めてあつて、日光へは髪の毛を少し移したのであると、普通いふて居る。こゝから見下すと、數哩に渡つて海岸が廣ごつて、一方は荒涼たる原野はそゞろに武夫の昔を偲ぶるのである。